

「当たり前」の裏側にあるもの

松山市立南第二中学校 3年 来島 奏真

私のおくすり手帳には、一枚のピンク色のカードが入っている。「ひとり親家庭医療費受給者証」と書かれたもので、母は病院に行くたびに会計でそれを出していた。子どものころ、私はそのカードをただの保険証のようなものだと思っていた。母が当たり前のように出しているので、特に気にすることもなかつたのだ。

しかし、中学生になり、自分一人で病院に行くことが増え、受付でカードを差し出すのが当たり前になると、ふとを考えた。「どうしてこのカードを出すと、医療費がかからないのだろうか。」今まで疑問に思わなかつたことだが、急に気になるようになった。

調べてみると、このカードはひとり親家庭の子どもや親の医療費を助ける制度で、その財源は税金であることがわかつた。本来なら診察代や薬代に何千円とかかるところを、税金で補ってもらっているため、窓口で支払いがかからぬいのだ。私はそのことを知って胸がじんわり熱くなつた。もし、この制度がなければ、母の負担はとても大きくなつていただろう。母は毎日家事と仕事をしてくれている。そのうえ医療費まで負担していたら、生活はもっと大変だつただろう。

あるとき、母が「税金は道路や学校だけじゃなく、病院や福祉にも使われているんだよ」と話していたことを思い出した。そのときは「へえ」と聞き流していたけれど、今、自分が病院でカードを出すようになってみると、その言葉の意味がぐつと身近に感じられる。

税金が生活に直接関係していると実感したのは、このカードの仕組みを調べてみたときが初めてだった。税金は「自分が払った分が自分に返ってくるもの」ではなく、「みんなで出し合い、みんなを支えるもの」なのだとあらためて強く感じた。

私にとって当たり前に思っていた医療費がかからない制度も、実は当たり前ではなかつた。知らない誰かが納めてくれた税金が、自分や母の生活を支えてくれている。そう思うと、ただカードを出すだけの行為にも感謝の気持ちがこもるようになった。

一方で、制度を当然のように使うだけではいけないとも感じた。必要のない受診や無駄な利用は、税金の浪費につながる。税金は限りある財源で、本当に必要な人のために正しく使われるべきだ。私は「無料だからいいや」と思はず、ありがたさを忘れずに利用したい。

あと四年で私は大人になり、働いて税金を納める立場になる。そのときは、支えてもらう側から支える側に変わる。元気に学校へ通い、病院に行けるのも、税金のおかげだ。その感謝を忘れず、社会で役立つ納税者になりたい。税金は目に見えないけれど、私たちの生活を支えてくれている。そのありがたさを教えてくれたのは、母のピンクのカードだった。これからも当たり前のことと思わず、感謝しながら生きていきたい。